

## 滋賀県文化審議会重検討事項調査研究部会の検討状況について

## 第1回会議（5月2日開催分）

## ○支援する対象について

- ・課題とされている内容が、芸術分野に偏っていたように感じる。滋賀の文化の特徴・魅力は芸術や文化財が、自然や歴史、人などを含めて三位一体として、地域に生きているところ。北部などでは少子高齢化が進んでいる。（対象となる分野を）芸術文化に限定せず、地域文化を持続可能にするような支える仕組みにできれば魅力的だと考えている。（三宅委員）

## ○文化芸術関係者を支援する資源について

- ・子どもや若者、次世代を育てる者を支援してほしい。横つながりが大事。（磯崎委員）
- ・滋賀で活動しようとする県外活動者も支援対象にしてほしい。（磯崎委員）
- ・既存の人材確保プログラムの効果検証と大学等との連携の可能性の検討。（上田部会長代理）
- ・文化芸術の可視化とトリアージ。（地域の行事など継続が難しい場合に、行事を記録し、未来の再開を期して残す、その活動を支えるためのアーカイブ化）（上田部会長代理）
- ・無くなってしまいそうな文化や習慣のアーカイブ化。（小林部会長）
- ・どのような資源があるのか、もっと具体的に考えてはどうか。（若林委員）

## ○文化芸術関係者と資源をつなぐ仕組みづくりについて

- ・相談窓口や補助金制度など、すでにたくさんある資源をワンストップで提供できないか。（小林部会長）
- ・ITを活用して、自分の条件と合った文化施設をピックアップするアプリができないか。そのためのデータベースを作ってはどうか。（上田部会長代理）
- ・文化と地方創生をどのような結びつけるか考える必要がある。（上田部会長代理）
- ・県庁の関わり方がイメージしづらい。（若林委員）
- ・アーツカウンシルについて、他の選択肢を含めて検討することが大事。（若林委員）  
（アーツカウンシルを作るか、県職員の中に、文化担当職員を配置するのか等）

## 第2回会議（7月1日開催分）

## ○滋賀らしさ、滋賀の魅力について

- ・図では「目標」としてイベントが前面に出ている印象がある。芸術は滋賀の魅力の一部だと思う。滋賀の魅力は、琵琶湖のまわりに、山、川、寺社、町並み、ヨシなどの文化的景観があり、祭りなどの民俗行事が生き活きと輝き、音楽イベントなどの地域交流もしっかりあることだと思う。（三宅委員）

#### ○文化芸術関係者の範囲について

- ・おもに文化芸術を生業とする人やプロの人なのかもしれないが、滋賀ではとくに、祭礼行事等に際して、市井の、アマチュアの人びとが技芸や創造性を発揮して大きな役割を果たしている。一方、プロフェッショナルのアーティストや演者が、地元の祭礼行事にかかわることで、刺激を与え、継承の助けとなったり、イノベーションの触媒となることもある。文化芸術を生業とする人、プロの人たちを支援するためにも、文化芸術を生業とする人以外の人の存在やその活動、そうした人たちとの交流も重要である。（上田部会長代理）
- ・漁業やアーティスト、文化財を保護する人・修復する人もターゲットと思っていたが、図からは、読み取れない。（小林部会長）
- ・ある文化や芸術・芸能が盛んであるためには、文化芸術の頂点のものだけでなく、裾野を含めた全部が生きていることが大事。（上田部会長代理）

#### ○今後、5年間の取組について

- ・守っていききたい文化芸術は何か。そのために何をするのかを考えるための5年間。そのための取組は大きく2つ、「調査と発信」と「相談と助成」。これまで知られていなかった滋賀県の文化資源を調査し発信する。発信すればアーカイブになる。また、文化芸術従事者は悩みをどこに相談したらいいのか悩んでいるので、相談体制をしっかりと、助成体制も整える。（若林委員）
- ・滋賀県の文化芸術資源の可視化。（若林委員）
- ・資料1の3つの取組を行うためには、情報収集が大事。（三宅委員）
- ・滋賀の文化芸術を可視化する活動を前面に出したほうがいい。地域により力が入っていないところがある場合、5年間集中的にその地域に取り組んだ方がいいかもしれない。（小林部会長）
- ・地域間において、文化振興の程度に差がある問題を解消し、機会を等しく提供していく目標は、次期計画で大きく掲げる必要がある、喫緊のテーマである。（若林委員）

#### ○取組の主体について

- ・中間支援の組織が行うことが人材育成やネットワーク構築の場づくりだと思うが、それぞれ、誰が行うのか明確にしてほしい。（磯崎委員）
- ・文化芸術振興課がハブになって動かないと責任の所在が分からなくなる。（若林委員）